

する。

【対象】2006/5から2010/12までに1st line治療としてオキザリプラチン併用抗癌剤治療を行った切除不能・困難な肝転移症例76例，男：女＝45例：31例，年齢37-89歳（中央値63.0歳），同時性：異時性＝65例：11例。

【結果】ペバシツマブ使用例は52例，同時性65例中原発巣先行切除例39例，肝切除例27例（切除率35.5%）あった。切除不能・困難理由を分類しその切除例（切除率）を検討した。肝転移のみの場合は35例中18例（51.4%）切除，肝転移のみのうち多数個（6個以上）の腫瘍がある場合は22例中8例（36.4%），主要脈管に近い場合は6例中5例切除（83.3%），数は少ない（5個以下）がサイズが大きい場合は2例中1例（50.0%）が切除可能となった。他転移有りは41例中9例（22.0%）が切除され，肝切除不能・他転移切除可能例は4例中3例（75.0%），肝切除可能・他転移切除不能例は11例中4例（36.4%）切除，肝切除不能・他転移切除不能例は26例中2例（7.7%）切除された。

【まとめ】#1肝転移のみの場合は切除率が高かった。#2他転移がある場合切除率は低かったが切除可能な症例が認められ，切除の可能性を追求しながら抗癌剤治療を行ってゆきたい。

## 5 大腸癌術後多発性肝転移に対し Bevacizumab 併用化学療法後に肝切除をおこなった2症例の経験

長谷川 潤・仲野 哲矢・萬羽 尚子  
佐藤 大輔・内藤 哲也・谷 達夫  
島影 尚弘・田島 健三

長岡赤十字病院外科

【はじめに】当科において，Bevacizumab（以下，BV）併用化学療法後に肝切除を行った2症例を経験したので報告する。

〔症例1〕61歳，男性。Stage III bの下部直腸癌に対し超低位前方切除術D3施行し術後補助化学療法を行った。術後1年目に肺転移（1個），肝両葉にわたる肝転移（6個）を認めFOLFOX + BV

療法施行した。肝転移は著明に縮小し，4か所の肝部分切除を行った後に肺部分切除を行った。組織学的効果判定はGrade 1bであった。

〔症例2〕61歳，女性。Stage III aのS状結腸癌に対しS状結腸切除術D3施行し術後補助化学療法を行った。術後1年目に肝転移（3個）を認め，CapeOX + BV療法施行した。画像上PRと判断され肝中央2区域切除術施行した。組織学的効果判定はGrade 3であった。

【考察】一次療法におけるFOLFOX + BV療法とCapeOX + BV療法等は同等といわれており，高い奏効率を示している。また，BV併用療法はK-ras変異の有無にかかわらず施行可能であるため，術前化学療法として有用であると考えられる。

## 6 大腸癌化学療法後切除例の検討

川原聖佳子・西村 淳・新国 恵也  
河内 保之・牧野 成人・北見 智恵  
中野 雅人・堀田真之介

長岡中央総合病院消化器病センター外科

進行再発大腸癌に対する分子標的薬を含めた術前化学療法は，効果があれば臓器温存が可能となり切除率が向上し，downstagingが得られれば生命予後の改善が期待できるが，効果が無い場合もあり，その適応についてまだ一定の見解は得られていない。2009年1月から2011年10月までの化学療法後大腸癌切除症例は原発巣9例，肝転移13例，リンパ節転移3例，肺転移6例であった。化学療法が理由で術後合併症を併発した症例は無く，全例安全に手術が施行できた。原発巣においては9例中6例が奏功し，1例はpCRが得られた。切除不能と判断された場合でも集学的治療を計画的に行うことにより根治切除できる場合があり，今後もさらに症例を積み重ねて検討して行く予定である。